

樽一物語 序章

平成29年8月27日 新生「樽一」2号店「新宿三丁目店」のオープン日。
すべてのお客様が帰り閉店した店の中で後片付けをしながら、「樽一」店主の佐藤慎太郎は、「樽一」創業者佐藤孝のことを思い起こしていた。……

佐藤孝は「樽一」の創業者であり、現在の店主佐藤慎太郎の実父である。
地元宮城県から上京し、日大農獣医学部水産学科を卒業後、
サラリーマン生活を経て、昭和43年、全く畑違いの居酒屋「樽一」を高田馬場に出店した。

慎太郎は、学生時代からアルバイトとして樽一で働き平成5年に大学を卒業した後、
「樽一」を継ぐべく本格的に店に入り修行を始め、仕入、仕込み、接客などを学んでいた。

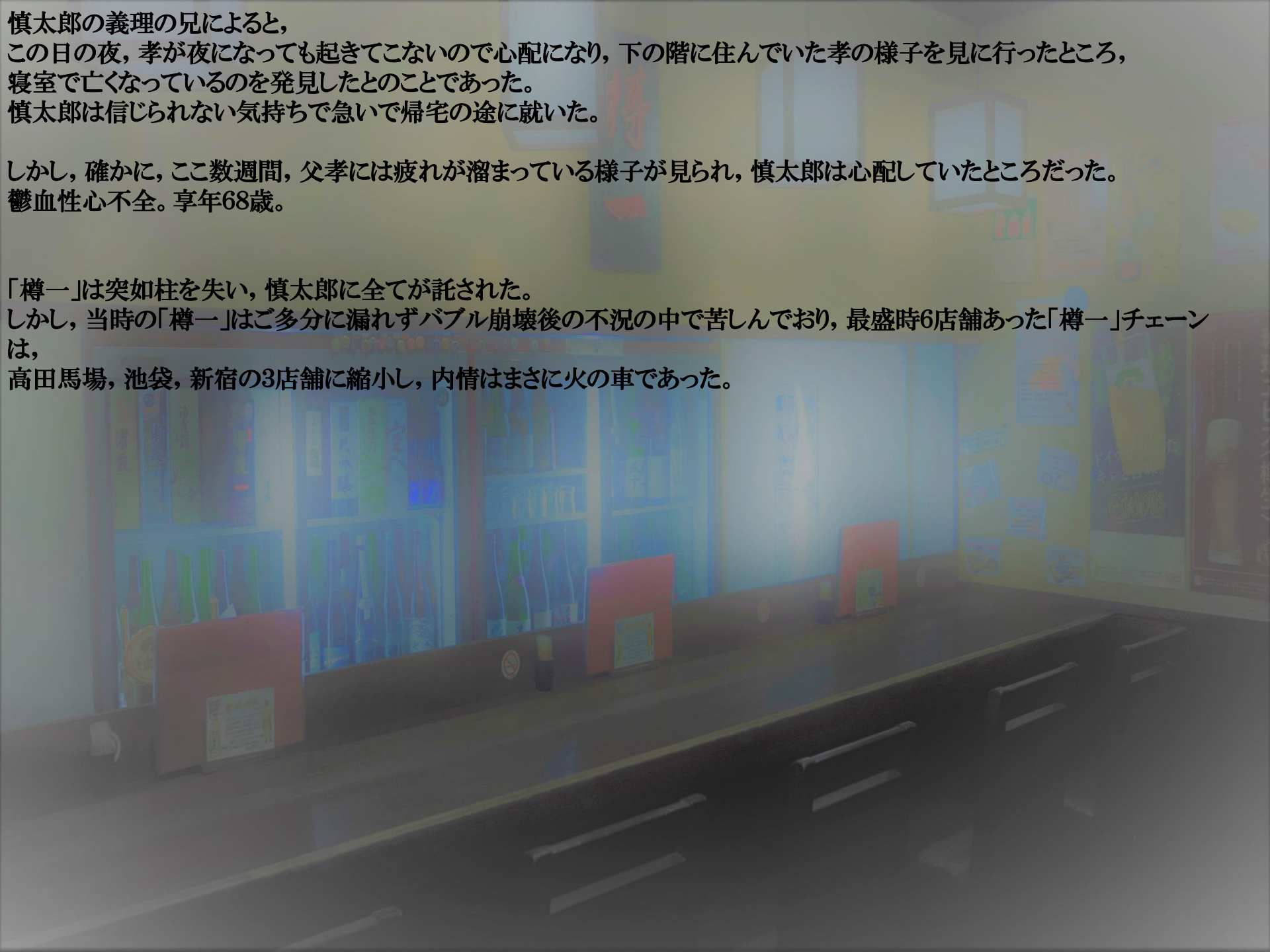
平成15年7月7日のことであった。

その日、慎太郎は、いつものように佐藤孝と共に築地に朝の仕入に行き、トラックで「樽一」各店舗への魚の配送を終えた。
その日は午後から休暇を貰うことになっており、慎太郎は午前中の魚の配送を終えた後、慌ただしく、休暇を過ごす長野県白馬に向かった。

父佐藤孝は、仕入を終えた後、「樽一」開店までの間、昼食を摂りその後自宅に戻って昼寝をすることを日課にしていたが、この日も佐藤孝は自宅近所のそば屋でそばを食べた後、自宅に戻って昼寝をして夜の営業に備えていた。

慎太郎が白馬に着いたその夜、宿泊中の知人のホテルに慎太郎の義理の兄から電話があった。
慎太郎が電話口に出ると、

「父が先ほど亡くなった」
との連絡であった。



慎太郎の義理の兄によると、
この日の夜、孝が夜になっても起きてこないの心配になり、下の階に住んでいた孝の様子を見に行ったところ、
寝室で亡くなっているのを発見したとのことであった。
慎太郎は信じられない気持ちで急いで帰宅の途に就いた。

しかし、確かに、ここ数週間、父孝には疲れが溜まっている様子が見られ、慎太郎は心配していたところだった。
鬱血性心不全。享年68歳。

「樽一」は突如柱を失い、慎太郎に全てが託された。
しかし、当時の「樽一」はご多分に漏れずバブル崩壊後の不況の中で苦しんでおり、最盛時6店舗あった「樽一」チェーンは、
高田馬場、池袋、新宿の3店舗に縮小し、内情はまさに火の車であった。